

全日本リコ研だより 第3号

平成28年2月12日発行 JRS編集人 小山内 仁



巻 頭 言

全日本リコーダー教育研究会
会 長 牧 野 光 洋

「トライアル&エラー」

何回でも繰り返し試行錯誤して、100%リコーダーが好きだと言ってくれる児童生徒を育て上げる。これが、本リコーダー教育研究会の先駆者、故徳山博良先生、故原田彰先生、田中吉徳先生、三木貞夫先生、影山樹雄先生を中心とする、リコーダー教育に尽力された方々の思いであったのではないかと思います。

「全日本リコーダー教育研究会」として産声を上げた本研究会も、40年という月日がたち、今まさに当時の思いが実っているのか検証すべき時に来ていると思います。現学校教育の中において、教具としてのリコーダーがしっかりと根付いているだろうか、児童生徒が生涯にわたリコーダーを愛好していくだけの興味意欲関心を伝授できただろうか。児童生徒のためにさらなるトライアル&エラーを重ねていくべく、是非、全国のリコーダー教育を実践している皆様方のお力添えを賜りたいと願います。そして、本当の意味での全国組織

となるように組織の充実を図り、さらに「発信する」全日本リコーダー教育研究会から、「交流する」全日本リコーダー教育研究会を目指して活動していく所存です。大きな変革には、皆様一人一人のリコーダー教育にかけける情熱とご努力が必要不可欠です。「努力しろ、難しいものと思うな。人柄を磨け、教養高き人格者に」と、一所懸命訴えてまいりたいと思います。

さて、今年も全日本リコーダーコンテストが近づいてまいりました。参加団体の皆様は、コンテストに向けていろいろと準備されていることと思います。今年のコンテストでは是非、ご自分が演奏されるだけでなく、いろいろな団体の演奏を聴いて、一緒に学び合っていたきたいと熱望いたします。

聴き合うことを一つの契機として皆様様の「指導力」を結集させてください。画一的な人材ではなく、多様な人材がいることが教育力を伸ばすために必要です。本研究会は40年も地道に努力してきました。が、今までどおりでは、変化しません！ 是非この一年は、指導者自らリコーダーを吹いてください。初心に戻り、演奏の面白さが見えるかもしれません。演奏の面白さへの気づきが、児童生徒の「よさ」を最大限に伸ばす力となると確信して、この一年「trial and error」の上、結集しましょう。

第36回 全日本リコーダーコンテスト 審査員寸評



沖縄県豊見城市立上田小学校
「ルーマニア民俗舞曲」

上江洲 学指揮

東京藝術大学非常勤講師

審査委員長 吉 澤 実

演奏を聴いていて直感的に感じたことだが、子どもが楽曲に内在しているいろいろなキャラクターを感じ取り詳細に表現しているところが大変興味深かった。それぞれの小品の持つ性格をつかんで味わって音表現していた。まるで洗練されたオリジナルの民俗舞曲

のように伝わってきた。楽曲の特徴をつかんで各パートのバランスを考え、高音から低音までのレジスター効果を巧みに使い遠近感、立体感ある音姿を美しく浮かべていた。それはまるでディズニーのアニメーションを観ているようだった。

審査を忘れるほど上田小学校の演奏に集中して聴き終わると同時に、様々な疑問が浮かんできた。

この音楽づくりはどのように練習してきたのだろう？このニュアンスはどこから生まれてきたのだろう？この60人ほどのリコーダーオーケストラでどのようにしてこれほどの音程と美しい和音をつくりあげたのだろう？

昨年は津嘉山小学校で上江洲先生は指導してコンテストに出場していたが、今年、上田小学校に異動してリコーダークラブを立ち上げたばかり。ほぼ10ヶ月でどのようにしてこれだけのオーケストラをつくってきたのだろう？

自由と規律のバランスの良い両立がそこにあった。デューイの唱えた自由な教育法とバースの提唱した規律ある教育法が互いにせめぎ合って生き生きと融合している場がここにあった。子どもは、積極的に演奏に参

加しながら全体の調和を常に保っていた。

これは子どもの学校生活の理想的な姿だと感じた。子どもがこれから成長するにあたり、このすばらしい体験は演奏した子ども一人ひとりに大きな影響をもたらすだろう。

学校教育に音楽という教科が何故あるのか、音楽という教科が何故必要なのかを痛いほど認識させられた瞬間でもあった。音楽こそ全ての学問の根底にあり、リベラル・アーツであることを明確に示していた。



第36回 全日本リコーダーコンテストの 印象

大阪音楽大学名誉教授

北 山 隆

今回のコンテストは昨年度に比べてやや穏やかな1日であったと思います。

逆にこのような時はコンテストの根幹的な意味や、演奏の基本的なことを改めて復習できる、いい機会でもあります。

近年、回を重ねる度にいい演奏の「基盤」が上がって来たように感じています。

基盤とは紙に書かれた楽譜・音符を、空間の生きた音楽に変える「演奏」の最も根幹的な作業です。会ったこともない作曲家の楽譜を、どう生きた音楽に変換するか。アーティキュレーションという言葉は日本語に変換しにくいのですが、まさにこの作業がアーティキュレートすることなのです。

今回の演奏でもよくあるのが、ひたすら音符を音に変えているだけで終わるものでした。指揮をされている先生も非常に真面目に変えた音群をまとめておられる。それはそれで大切なことですが、高位の団体はそれだけではないのです。

凡その小学生の年代であれば、自分たちを取り巻く日常の社会や自然の中で感じることの多さ、深さが賞に繋がっていると思います。まるで賛美歌と同じくらいシンプルな楽譜を演奏した三重・鈴鹿市立旭が丘小学校の演奏がまさにそれを示しています。

中学校となると指導者の先生が多くの音楽ジャンルに精通していること。

「音楽のひねり、面白さ」を生徒達と語り合えることでアーティキュレーションを決めたい演奏が展開されました。

いくつかの団体が演奏していた、既存の名曲のリコーダーバージョンの場合、力演であってもオリジナルを意識しすぎて、却って曲の価値を落とすケースが多いですね。それに引き換え、沖縄・豊見城市立上田小学校、東京・アッリエーヴォリコーダーオーケストラの演奏はリコーダーの特質を熟知して、リコーダーの魅力をまるで潤滑油のように注いでいたのは特筆すべきことですね。

私はこのコンテストをむき出しのリコーダー競演会ではなく、リコーダーで調理した競味会であって欲しいと思います。

客席の人々の心に届く演奏とは何かを今一度考えてみませんか。



幅広いレパートリーに親しもう

リコーダー奏者

本 村 睦 幸

今年の全日本リコーダーコンテストも、大ホールで、リコーダー合奏を聴かせていただきました。日本全国から選抜されて、また台湾からも、コンテストを目指して周到に練習を重ねて来られただけあって、どの演奏も熱意あふれるものでした。

ご存知のように、リコーダーは幅広いレパートリーを持っています。現存する最古のリコーダーは13世紀のもので、おそらく12世紀には原型は誕生していたと想像されます。そのような中世の時代から、現代に至るまでずっとした親しまれた楽器であり、特に、ルネサンス、バロックの時代には主要な木管楽器の一つとして活躍していましたし、現代でも世界各地で新しい作品が生み出されています。編成の面でも、小ホールでのコンテストでやっているような、一本だけの無伴奏、チェンバロなどの通奏低音を伴うソナタや組曲、あるいはピアノなどとの合奏、さらに二重奏、三重奏、四重奏

のほか、弦楽器や他の管楽器との合奏曲や協奏曲もあります。そしてもちろん、大ホールでのコンテストでやっているたくさんの方のリコーダーによる重奏、合奏があるわけです。

重奏、合奏を中心に練習を重ねてコンテストで素晴らしい成果を聴かせてくださった皆さんに対して、講評を申し上げるなら、第一に、今後じっくりと時間をかけて、そのような幅広いレパートリーに目を向け、取り組んで行っていただきたいということになりましょう。

リコーダー合奏に限定しても、多彩な可能性がある

のは言うまでもありませんが、さらにそこを越えて、様々な独奏作品にも取り組んでみる、二重奏や三重奏など小編成のレパートリーも探求してみる、他の楽器との合奏もやってみる、ルネッサンスやバロック音楽、さらには現代音楽にも挑戦してみる、それと同時に関連するいろいろな音楽を聴いてみる、というようなことを進めて行けば、その基礎の上で、合奏の可能性もさらに大きく花開くに違いありません。

これからも、リコーダーを良い友達として、皆さんの音楽の世界を一層豊かにして行ってください。



桐朋学園大学古楽科非常勤講師
リコーダー奏者

古橋 潤一

コンテストの審査をしていて毎年のように思う事、それは、賞を取るための選曲や演奏が多くて面白くないという事です。

誰が聴いても演奏の善し悪しが(と言ってもそれすら主観的なものではありませんが…) 判る曲が課題として提示されると良いとすら思っています。

例えば、超前衛的な作品が良い点に繋がりやすいからといって、そういう曲ばかりが本選に出て来るようではいけないと思うのです。

僕は採点する時に、古い曲を選択している場合は自分の中で基礎点を高く設定しています。失敗がそのまま失敗に聴こえる曲と、そうでない曲を同じ基準では判断できないと思うからです。リスクを背負った選曲にはそれなりに高い基礎点をあげたいと思っています。

勿論、前衛的な現代曲がダメだとか嫌いだとか言うるわけではありません。どんな曲であってもその楽譜から作者の意図を量り、そこに自分の思いを乗せて演奏するという作業にかわりはありませんから。

しかしながら、昨今の大会では特に、現代曲や編曲ものが幅を利かせて、元々リコーダーのために作られた耳馴染みのある曲、いわゆるバロック以前の曲が少なくなったように思います。それは僕にとっては残念な事です。温故知新の精神は、古くから存在するリコーダーのような楽器には大切な事だと思うのですが…

もう一つ、演奏そのものについても同じような事です。その音楽についてじっくりと考え、それを楽しんで演奏する事の先に、良い結果がついて来るようなパフォーマンスが聴けると嬉しいです。

まずは希望の賞ありきの演奏は聴きたくないですね。僕達をも聴衆として楽しませてくれるような演奏が出てくると審査も楽しい作業になるのですが…今はそうとは言い切れません。

今年こそそんな演奏が出てきてくれるのを楽しみにしています。



「音楽をする」ということ

リコーダー奏者
上野学園大学講師

太田 光子

私にとって4回目の審査となる今回は、「独奏・重奏部門」の審査を担当いたしました。全国各地から集まってきた、リコーダーに一生懸命取り組んでいる皆さんの演奏をお聴きできることに、本当に幸せを感じております。本番の日まできちんと練習を積み重ねてきて、心をこめて取り組んできたのが、演奏を通してよく見えました。

そして今回特に嬉しく思ったのが、これまで私が感じ

ていた、選曲の傾向の偏りが減ったことです。バロック時代のリコーダー音楽も、現代の作曲家による作品も演奏されていて、リコーダーの歴史を作ってきた幅広いレパートリーを聴くことができました。

テクニック的にも、音楽的にも、アンサンブル面でも、どの団体も一糸乱れぬ演奏を展開し、本当にすばらしく思いました。中でも、リコーダーの音を自分の言葉として語り、時には歌い、ホール空間に響いている自分の音を自在に操っているような、まさに「音楽をしている」ことを演奏している本人たちがまず楽しんでいて、聴衆も楽しませてくれる、とても魅力的な出場者が幾人もいました。

特にそのような「音楽をしている」という面で印象に残った団体を挙げたいと思います。小学校では、J.van

エイク作曲の「美しい羊飼いの娘フィリス」を演奏した北海道・北広島市立西部小学校、澄みきったまっすぐな音が大変美しく、細かく難しいパッセージの連続であるにもかかわらずミスなく吹ききり、かつ音楽的であった最後のヴァリエーションは大変秀逸でした。三重県鈴鹿市旭が丘小学校によるJ.デュアルテ作曲「4つのアメリカのダンス」は、伸びやかな歌いっぷりと、効果的にスタッカートを使い方により、軽やかにダンスのリズムに乗っていた演奏は、私も審査することを忘れてしまいそうなほど、本当に楽しませてくれるものでした。

中学校では、北海道・網走市立第五中学校のJ.ターナー作曲の「4つの楽しみ」。まるでこちらに訴えかけてくるような語る部分と最終楽章のリズミックな部分とのコントラストが見事で、「この曲でこういう演奏をしたい」という明確な意思が感じられました。台湾の廖庭蔵さんのA.ヴィヴァルディ作曲協奏曲イ短調の演奏は、細かい16分音符が並ぶところは、ややもすると音を並べるのが難しく機械的になりがちなのですが、難曲の難所であっても「音楽すること」を忘れない、音

乐的なソロ部分が魅力的でした。

高等学校では、三重県県立桑名高等学校のD.ライアン作曲「リコーダーとピアノのためのコンチェルティーノより」での、特にバデナージでの美しい歌い方が大変印象的でした。ルバートの自然さすばらしかったです。音楽が自分の言葉になっていて、自ら音楽を感じながら演奏していることが良く伝わってきました。

一般の部では、Twin PrimeのS.フランツ作曲「グランド・デュオ」での、伸びやかな音楽づくりに、耳と心を奪われました。2人で紡ぎだす細かい音が勢いに乗って流れていて、場面場面で役割が変わり、楽しい二人のおしゃべりを聴いているかのよう。休符での間の取り方も、ホールの大きな空間と響きを意識した取り方で、会場に響き渡っている自らのリコーダーの音を聴きつつ音楽をしている余裕も感じられ、堂々たる演奏でした。

さて、また来年はどんなすばらしい演奏に出会えるでしょうか？ 今からとても楽しみにしております。



「いちばん出来ること」、と
「いちばんしたいこと」
「いちばん伝えたいこと」

リコーダー奏者

吉澤 徹

このコメントを書かせていただくのも三回目となりました。過去二回の拙文をあらためて読み返し、何だかコンテストの審査員講評にはなっていないなあ、と反省ばかりです。それでも懲りもせず、無限の可能性を秘めた皆さんの出場演奏に際し、こんなことを思っ欲しいなあ、と言う私の願いを書き連ねてしまいますね。

初めて譜面を渡され、おののきと期待の中で相当の練習を積まれて準備されていることでしょう。前回の皆さんの演奏を振り返っても、全ての方々がスキルとしてのレベルは相当に高く、甲乙の評価もおこがましい程完成された演奏の数々でした。

例えば：

フレーズのアタックの揃い方

確りとしたブレスの揃え方

ダイナミックスの理解度と方向性

クリアなテンポの正確性と一体感

キメのハーモニーでのチューニング

など、皆さんが努力し、時間をかけた完成度の程がうかがえるのです。で、そこで今回のタイトルを振り返っていただきたいのですが、皆さんのその演奏がはたして自身によって、「いちばんしたいこと」だったのでは

うか？

それとも、「いちばん出来ること」だったのでしょうか？

そしてその演奏を思い返して、「いちばん伝えたいこと」を貴方は感じましたか？

アタックが見事に揃っているフレーズの印象は、とてもエネルギーでフォルテ、身の詰まった印象の演奏が殆どでした。でも、もしかしてそのメロディーはもっと繊細に、ふわっと歌いたかったのでは有りませんか？

テンポ／リズムを確りと揃えた時に、ビート感が頻繁に立ちすぎて四拍子なのに八拍子のように、四小節で一つのメロディーが一小節ずつの細切れに聴こえてはいませんか？

でも、もしかしてそのメロディーはもっと流れるように、大きなストロークで歌いたかったのでは有りませんか？

つまり、アンサンブルとして精度を高める努力をするうち、知らず知らずのうちに「いちばんしたいこと」が、「いちばん出来ること(＝ミスをする確率が一番低い吹き方)」に変わっていることが有るのです。フェイドアウトをする様なディミニュエンドでフレーズを終る時、最後の音の長さや音色の加減が綺麗に揃うのは、実は至難な業です。運良く揃った時にはその演奏を振り返って、「いちばんしたいこと」「いちばん伝えたいこと」が音になったことを実感してみましょう。

管楽器は、傾向として圧の高い息による音色の変化に乏しい、マシンライクな音が、上記スキルを「いちば

ん出来る」のに最も適する傾向になります。テンションの緩い持続音、フォルテよりピアノの音などは音程の維持も難しいと思います。けれどもさらえばさらう程、リコーダーは一つの音の中に、とても微妙な音色と陰影感が存在するのがだんだんと見えてきます。ただそれは、貴方の心がそのような音色を渴望することで初めて見えてくるものだと思います。

コンテストですからミスをなくす努力は必須でしょう。でも、譜面を漸く音に出来た時に、「こんな素敵なメロディーなんだ」と思った時の貴方の「いちばんしたい、伝えたい」気持ちが、感動が、「ちゃんと吹くこと、が

一番出来る(やり易い)やりかた」に変わってしまった時、何か失われていないかどうかを、メンバー相互で、また先生と共に感じ、考えて、「やっぱりこんな風に吹きたい」という演出にどんどんトライして下さい。「いちばん出来難い」吹き方でミスばかりでも、偶然一回でも出来た時に「この気分を伝えたかった」と実感出来たら、皆さんの体と心の中には、その素敵な吹き方がもう仕舞ってあるのです。それを何時でも出せるようにするのが、本当に楽しく充実した練習になると信じています。

また、お会い出来る日、素敵な演奏を心待ちにしています。



横浜国立大学非常勤講師
リコーダー奏者

川 端 り さ

五重奏は各パートを一人で担当するため、お互いの音程合わせ、また一人でも音程、リズムを保ちながら全体の表現の一部を担うという難しさがあります。一人以上が同じパートを演奏する合奏では各パート内で音程やアーティキュレーションを揃えるという要素も加わります。音楽を全員で一心となって作り上げる難しさ、それゆえの喜び、悔しさ、また達成感を大ホールでの渾身の演奏からひしひしと感じました。

人数が少なめの合奏では一人一人の音程が目立ちやすいですが、《フルートラス》を演奏された沖縄・県立南風原高等学校のグループは全体的に音程がよく、また曲の様々な表情の変化もよく表現できていたと感じました。

人数が多い合奏でも音程は難しい要素ですが、比較的ゆったりした曲(またはそのような部分が多く含まれた曲)を演奏された三重・鈴鹿市立旭ヶ丘小学校、台

湾・新竹縣十興國民小学校、また北海道・訓子府町立訓子府小学校のグループの音程がよく、また音色も粒がそろっていて、曲の魅力を引き出していると感じました。是非その技術を保ちながら、技術的、音楽的に更に難しい曲に挑戦していただきたいと思います。

強弱をつけるとどうしても音程が乱れてしまうのがリコーダー演奏の難しい点ですが、躍動的な個所で息を入れすぎないようにコントロールすること、また曲が求めている表情を出すために意図的に発音を選ぶこと、静かな個所で替え指を利用すること(替え指を特別なものではなく、標準的な運指の一部と考えること)などを心掛けていただければ更にすばらしい演奏になると思います。

また、北海道・笛部(whoAboo)の皆さんの演奏がとても魅力的でした。様々なスタイルを取り入れ、次はどうなるのか?と期待させるアレンジ曲《笛部こきりこ節2015》を、ご自分達のカラーを十二分に出しながら楽しそうに演奏されていたのが印象的でした。演奏の「演」は演技の「演」、と指導していますが、演奏に息吹を吹き込む心は、観客に音楽の喜びを伝える原点なのでは、と改めて感じました。



「息づかい」の大切さ

リコーダー奏者

森 吉 京 子

2014年12月には第43回リコーダーコンテスト(東京大会)、そして、2015年3月の第36回全日本リコーダーコンテストで、出場されたみなさんの熱気あふれる演奏を、一審査員として客席から楽しませて頂きました。

リコーダーは、息づかいがそのまま音になる楽器、と言ってもいいかもしれません。グループ演奏でも個人演奏でも、普段から息づかいのことを考え、呼吸の練習を積み重ねている演奏者と、もしかしたら息づかいについてはあまり考えたことがないかな・・・という演奏者との表現の差は、観客席にははっきりと聴こえてきました。

聴く人に伝わる音色・・・それは、単純に音量の差にあるわけではありません。

自分が吹くメロディを「どんな音にしたいか」という演奏者の表現上の希望をかなえるアーティキュレーシ

ョンには幾つかの選択肢があります。さまざまなアーティキュレーションを可能にするのは、リコーダーの場合は演奏者のタンギングですね。「タンギングをやわらかく」「タンギングをはっきりして!」などと、指導者から指摘を受けることがあるでしょう。

各種タンギングというのは、実は、身体の深いところで行なわれる呼吸が安定していて適切にコントロールされている時に初めてアーティキュレーションの変化を可能にします。アーティキュレーションの変化を可能にするタンギングは、リコーダーの「音楽ことば」です。呼吸がしっかりされている音色からは、演奏する人が一人でも複数でも人数に関係なく、表現したい「音楽ことば」の細かいニュアンスまで観客席にいる聴衆に届くのです。

不思議ですね。リコーダーはこんなにも単純な構造で見かけも小さいけれど、演奏者の大きな表現力を受け止めてくれる楽器で、そのうつわ(器)は果てしなく大きいということを、「息づかい」を大切にすることでぜひ実感してほしいと願います。

「どんな音にしたいか」ということをさらに真剣に考えると、これから練習しようとする楽曲の背景に見えるいろいろなことを知りたくなってきます。曲名一つとっても、意味を知ることから始まり、音楽に欠かせない「形式」を知ることにつながり、演奏のテンポや表情など、作品のあらゆる背景が音そのものに影響を与えていることが次々にわかってきます。作曲家が生まれた国のことを知るのも良いでしょう。作曲家が生まれた国の歴史について知るのも良いでしょう。指を早く動

かして音を出すことだけにとどまらない広い世界が、一つ一つの小さな音符を窓にして、その奥にずっと広がっているのです。

子供たちにとってリコーダーはほんのひとときの情熱を傾ける楽器であり、その後、興味の多くがリコーダー以外のものに移り変わっていったとしても、子供たちがリコーダーを吹いて楽曲一つを仕上げて行く過程で経験することのすべてが、その先の人生に光を注ぎ続けることになるに違いありません。

第36回全日本リコーダーコンテストが終わって間もなく、私は自身が制作にかかわるリコーダー専門誌のインタビューで、全日本リコーダー教育研究会名誉会員・太田正明氏にお目にかかるために、桜吹雪の美しい4月中旬の中目黒を訪れました。太田氏は、全日本リコーダー教育研究会発起人のお一人です。そして、私が故郷信州でリコーダー演奏の手ほどきを受けた師でもあります。「音楽を通して子供たちを教育することが、僕には楽しくて仕方がなかった。」という太田氏の言葉はたいへん印象的でした。

コンテストには、全国各地のみならず海を越えて台湾からもこの小さな楽器「リコーダー」の演奏を通して、ひとみ輝く純真な子供たちに音楽を語りかける情熱を持った先生方が教え子たちを率いていらして、太田氏をはじめ全日本リコーダー教育研究会を立ち上げた先生方の貴い理念が連綿と受け継がれていることをこの耳で確かに聴いたことを思い出し、改めて感動を大きくしました。



「講評、 そして今後についての提案」

リコーダー奏者

田中 せい子

今年も素晴らしい演奏の数々をありがとうございました。小ホールでの演奏は、例年のようにソロ、重奏部門共に練習を重ねられた成果がよく現われており、いつもながらそのレベルの高さには本当に感心させられました。

毎年どの団体にも共通してよく身に付いていると感じる事は、音の始まりと終わりの息がしっかり保たれているということです。よくありがちな、最後が下がってしまうような吹き方は聴かれず、その辺のテクニックを皆さんがしっかり身に付けていらっしゃる事に感心します。これだけでも自然に行うことは容易な事ではありません。

ここからさらに響きを引き出すためには、音がまっすぐだけでなく、その息がどういう風に出されているか、と考えることが必要です。音をまっすぐさせるために息を出しながら体に力を入れてしまうと音程が上ずり、神経質な音になってしまいます。皆さんの演奏には、まっすぐな音では吹けていたけれども、残念ながらこの力が入った息での吹き方が案外多かった様に思います。ここから不必要な力を抜く事が出来れば、より響きのある音が出て来るでしょう。このような音は耳に心地よいだけでなく、響きが多いため音も合いやすくなります。もちろんグループによっては、そのことを皆で共有していて、美しい響きを出している方達もいました。そのようなグループは概ね音程もよく決まっていたと思います。一方、この事に無関心に見えたグループは、各メンバーの息の出し方がまちまちで、音程も合わせにくかったようです。

今後このことが皆さんの演奏に、より定着して行っている欲しいと思います。そのためには楽器をぎゅっと握りす

ぎない、腕、肘、手首の関節が固くならないようにして、息が流れやすい体の状態を作ることが大切です。

今回特に印象に残ったのは北海道、北広島市立西部小学校の北野温也さんの演奏でした。

ヴァリエーション後半のテクニックのすばらしさもさることながら、よく流れる息、ハキハキとしたタンギングが際立っていました。さらに、息とタンギングの上手な使い分けができていました。これができると、ノンレガートではっきりと音を舌で止めても息の流れは全く止まらないので、音楽がよく流れます。また、とても自然な感じでTTT, TDT等異なるシラブルの発音ができていたことも驚きでした。

毎年強く感じる事ですが、日本国内でこのように大

規模なリコーダーコンテストがあり、非常に高いレベルでの演奏をされる方達がこんなにもいることに驚かされます。そして、生徒、児童の力をこれほどまでに引き出せる先生方の指導力には心から敬服致します。

今後このような先生方と、リコーダーを専門的に勉強して来た奏者達の交流が一層深まって行く事を望みます。というのは互いの交流を盛んにし、情報交換をすることによって、より多面的で総合的なリコーダーメソッドを作り上げることが出来るのではないかと思うからです。そしてそれは教育楽器としてのリコーダー、古楽器としてのリコーダー、両方の世界から今まさに求められているものなのではないでしょうか。



コンテストの思い出

リコーダー奏者
上野学園高等学校・同大学音楽学部講師

浅井 愛

私にとって全日本リコーダーコンテストは思い出深いものである。なぜなら、私自身が小学校5年生の時にこのコンテストへ出場した経験があるからだ。コンテストに出場した経緯は、幸運な事にリコーダーを熱心に指導くださる先生と出会ったからである。私がリコーダー奏者になりたいと強く思うようになったのはこれから何年も先の話だが、このコンテストがきっかけとなり演奏家の道へ進んだ事は確かである。きっかけというのはどこにあるかわからない。リコーダー奏者、指導者として活動している現在も時間の許す限りコンテストへ足を運んできた。今回、審査員としてお声をかけていただき、コンテストで審査出来たことは、大変光栄である。

私は、今回のコンテストにおいて、5重奏以上、合奏の部の審査を行った。本選という大舞台で各学校、団体が堂々と演奏している姿に感動した。中でも沖縄県立豊見城市上田小学校『ルーマニア民族舞曲』の演奏に釘付けになった。それは、響きの大きさ、音の美しさ、軽快なリズム感覚、音楽の組み立て方が大変素晴らしく、最後まで聴いていて心地よかったからである。

そもそも、難しいパッセージを吹くには指を速く動かす(回す)事もさることながら、息のコントロールが安定していないと難しい。同小学校の児童は、全体を通して息に安定感があった。しかしながら、複雑な和音の音程が崩れてしまったのは少々残念であった。それは、フォルテで確実に音程をつかみた

いと思っていでもどうしても音程が上がってしまうからである。音程が上がらないようにダイナミクスをつけるには、今後、替え指やシェーディングといったテクニックも必要となってくる。大合奏ゆえ、吹く人数を増やしたり減らしたりする事でダイナミクスをつけることは一つの手ではあるが、個人がもっと積極的にダイナミクスをつける事ができたのなら、更に素晴らしい演奏につながると思われる。リコーダーが楽にf, pを出せる性能をもっている楽器ならばどんなに気楽だろうと考える事があるが、替え指やシェーディングの技術を身につける努力は、無駄ではないはずだ。

そして、音を止める時はどのように意識しているだろうか。何となく音を止めるのでは無く、舌を使って音を遮る事を自覚することが非常に重要であり、そのことを注意するだけでも音楽の終わりのまとまりが変わってくる。また、速いパッセージになった途端、下あごがガクガク動き始めてしまう光景が何度かあった。舌の動きを一定に保つ為には下あごは下げないように注意する必要がある。このことは、自分自身にも言える事で、日頃から常に注意して演奏するよう心がけている。

私は今回のコンテストを審査させていただき、各団体のレベルの高い演奏に大変驚いた。そして、何より生き生きと演奏している姿が印象的であった。音楽づくりとは惜しみない努力と時間が必要となり、指導する側の先生一人ひとりの労力は大変なものである。

この中から一人でも、私のようにこのコンテストがきっかけとなり、リコーダー奏者、指導者を目指す人材が生まれることを切望し、今後の更なる発展を願うものである。

第40回記念全国研究大会実践レポート

東京大会を終えて ～臨海小学校児童の変容～

江東区立臨海小学校 音楽専科 水谷 美恵子

1.研究内容について

研究テーマ「心と心をつなぎ 音楽の世界を広げよう」

研究授業3年 題材名「リコーダーを使って音楽の会話を楽しもう」

「わぁーきれいな音、はやく吹いてみたい!」

「リコーダーって、こんなにたくさんの種類があるんだね!」。

子供とリコーダーとの出会いは とても大切である。真新しいリコーダーを初めて手にした瞬間、子供の心をつかみ、子供の心をワクワク躍らすことができるかどうかが指導者として、大切にしたいところである。リコーダーとはこんなにも美しい音色の楽器だということに気づき、興味をもてば、子供は自分から進んで練習し、運指も自然と覚えていく。

小学校の子供たちにとって、リコーダーは、身近な楽器であり、一音だけでも、教師側の指導の仕方によっては、楽しめる楽器である。また、タンギングを上手く使えば、シの音だけで、友達と楽しく会話をすることもできる。さらには、簡単に音を出すことができ、ついつい吹きたくてしまう不思議な力を持っている。これほど魅力的な楽器はなかなか見あたらないと言える。

今回の研究では、「ソ・ラ・シ・ド・レ」とリコーダーの導入時に習う比較的簡単な5音を使い、友達とリコーダーで会話を楽しむことを進めてきた。色々な友達と声で会話を楽しむだけでなく、音で会話を楽しむことで、自分の思いを表現するためにはどのように伝えらるのか、意図的に考えさせることができるのではないかと考えた。また、声で会話をする時よりも、相手の心情を読み取り、音楽を特徴付けている要素に着目して、悲しい気分、嬉しい気分などの表現力を意図的に工夫し、音楽の世界をよりひろげていくことができるのではないかと考えた。今回の研究の成果について以下に報告する。

2.授業実践を通して成果と課題

① 毎時間、リコーダーを使って、「●●な気持ち」の即興演奏を行う。

リコーダーでの表現力を向上させるために、まず、教師自身が様々な曲のリコーダー奏を行い、演奏を行った。色々な演奏を聴くことで、子供も「真似してみたい」、「私だったらこんな風に吹く」など自分の思いをもつことができるようになった。また、毎時間のリコーダー学習時には、「今日は、うれしいきもちを即興演奏しましょう」等、色々なテーマを提示し、即興リレー奏を行った。自作の短い物語を話したり、みんながよく知っている絵本を読んだりして、シとラの簡単な2音で気持ちを表現させる活動も進めてきた。

この取り組みから、子供は、楽しみながらリコーダーの基礎的な力・即興演奏と表現力を向上させることが自然とできるようになった。



～即興リズムリレーの活動は好きですかのアンケートより～

児童の感想

- ・シとラの音だけで、いろいろなかんじを表すことができて、みんなでリレーするといろいろな感じをきくことができて楽しいです。(M・H女子)
- ・かなしいきもちでリズムリレーをしたら、みんなの音がラの音がおおくて、かなしいリレーになっていたのでおもしろかったです。(Y・S女子)
- ・はくにのってリレーがつつくと、うれしいし、楽しいです。(N・Y男子)

このように、毎時間常時活動として、リズムリレーを行い、拍の流れにのりながら、即興演奏させることで、拍感、リズム感を自然と身につけることができた。また、1音や2音だけでも、演奏の仕方によって、楽しい気分や悲しい気分に変化させることができることを実感することができた。音楽を特徴づけている要素を使い、自分が表したい気持ちを、意図的に表現できる児童が増えていった。さらには、音楽づくりの内容が「いろいろな音の響きやその組み合わせを楽しみ、様々な発想をもって即興的に表現すること」の音楽遊びの部分を充実させたことで、全ての児童が楽しく音楽遊びを行うことができた。

子供たちは、リコーダーでの音楽遊びが大好きになった。友達の演奏の仕方を真似して、表現の幅をひろげたり、友達と違うリズムで表現しようと思いをめぐらしながら、リコーダーでの音楽の世界を現在も広げている。今後、更に音楽の世界が広がり、より一層深め、しっかりと味わうことのできる子供たちに成長していくと考える。

② 拍の流れにのって4拍分の音楽をつくることができるように
リズムを体で体感させる活動を進めた。

ともだちと音楽の会話を楽しみ音楽をつくる活動を行うためには、まず、4拍分の様々なリズムを覚えなければいけないと考えた。そこで、常時活動として、教師が太鼓で打った4拍分のリズムをリズムカードで表す活動を進めた。リズムがわかれば、その後の音楽づくりで、さらに楽しめるのではないかと考えた。始めたばかりの頃はなかなかリズムカードで表すことができなかった児童も、スモールステップで取り組みを進めていく中で、無理なくいろいろなリズムをカードで表すことができるようになっていった。また、拍の流れにのって打つことができなければ、音楽づくりを楽しむことができないと考え、授業の開始時には、まず、様々な4拍分のリズムを耳で覚えさせ、体で体感させていく活動を進めた。子供たちは、「今日はどんなリズムかな？」と授業の始まりを楽しみにしている。継続して取り組むことで、拍の流れにのって、4拍分のリズムを思い思いに表現できるようになってきた。今後もさらに発展させていきたい。

③ ソラシドレの5音を使い、リコーダーでともだちとおはなしをしながら
音楽をつくる。

音楽遊びで常に様々なリズムを演奏している子供たちであるため、4拍分のリズムを考えることは、容易になってきた。子供は大人の何十倍もの好奇心と向上心を持っているといつも感心させられる。4拍分を4回つくってみようという「やったあ!」という声が聞こえるようになった。子供は自分だけのもの、オリジナルが大好きである。ペアで会話をしながら、4小節の旋律をつくる学習は、自分を表現できる絶好のチャンスであり、集中して取り組む姿が見られた。子供たちは、リコーダーで試行錯誤しながら、自分たちが納得できるまで、旋律をつくり、音楽の世界を広げていた。また、友達のつくった旋律に興味をもち、まねしてみたり、それを取り入れて新たな工夫をしてみたりとより表現の幅を広げようとする姿が見られた。ペアで何気ない日常会話を、声ではなく音で表現することで、相手をより深く観察し、音から心情を読み取ろうと必死になっていた。この活動を通してコミュニケーション能力も向上させることができた。このように5音だけでも音を通して友達と楽しみながら音楽の世界を広げていくことができることを実感させ、リコーダーを純粋に楽しむ素地を小学校の教師がつくっていくことが大切なことである。素地があれば、生涯、リコーダーや

様々な音楽に親しむことができる大人になることができると思う。今後もさらに、音楽づくりの活動を充実させていきたい。

～リコーダーで友達とおはなしをしている児童の様子～



授業研究後の児童の感想

- ・ぼくは、言葉でしか会話をしたことがなかったけれど、音でも会話をするができることを知って、楽しくなりました。(S・A男子)
- ・音だけでもともだちのきもちがわかったり、自分のきもちを伝えられたりすることができてうれしかったです。(S・K女子)
- ・みんなのリコーダーの会話をきいて、本当にそういうふうに関話をしているようにきこえてびっくりしました。(H・S男子)

3、4・5年生によるリコーダー合奏と本研究のまとめ

前述した3年生と同じように、4、5年生もリコーダー導入時には、たくさんの音楽遊びを行い、リコーダーにたっぷりと親しむ時間をつくっていた。そのため、一人一人が音楽の世界を個々に広げている。今回、さらに、音楽の世界を広げようと、アルトリコーダー、テナーリコーダー、バスリコーダーを使い、リコーダー合奏に挑戦した。合奏を始めたばかりの頃は、一人一人の思いが強く出すぎてしまい、パートや全体でひとつの表現として合わせていくことが難しい場面もあった。しかし、練習を重ねていくことで、パートとしての役割を意識し、音の重なりや響き合い、一つの曲としてのまとまりを意識できる児童が増えた。今後も発達段階に応じたリコーダー教育のアプローチを行い、魅力を伝えていき、リコーダーの更なる発展の為に、尽力をつくしていきたい。最後にリコーダーは、会話をしなくても、人と人とが心と心でコミュニケーションを行い、自然と繋がることのできる楽器であることを今回の研究で証明できたのではないかと自負している。



パート別練習(菅先生による指導)



4・5年生のリコーダー合奏



吉澤実先生によるリコーダー合奏指導

40回記念研究大会を終えて ～これからのTRS～

東京リコーダー教育研究会 事務局長 井戸 正利

全日本リコーダー教育研究会にとって節目となる40回記念大会を、私ども東京の地で開催させていただき、誠にありがとうございました。また、全国より多くの皆様にご参会くださったことに、心より御礼申し上げます。会場の江東区は私の現任地でもあり、個人的にも有意義な経験となりました。

早いもので、皆様をお見送りしてから2ヶ月が経過しました。その後当会は研究大会の総括と平行し、年末のリコーダーコンテストにむけての準備に追われました。コンテストが終わりあらためて研究大会をふり返ると、いくつもの反省点が挙がりました。

一番は「スタッフの人員不足」です。当日もお話しさせていただきましたが、教育研究会でありながら当会は現役教員が数名。構成メンバーの多くは一般愛好家、というのが実情です。少人数での研究大会の運営は困難を極めました。その中でも最善の準備を進めて参りました。今後は教員仲間を増やす努力をするとともに、一般愛好家を巻き込み、実態に即した大会の在り方を模索すべきと考えます。

次に参加者の動員です。都内参加者は都外参加者に比べてとても少ない、という大変お恥ずかしい結果でした。背景には（PR不足等はもちろん一因ですが）東京独特の実情が関連していると考えられます。たとえば都内小学校の音楽専科教員で組織する東京都小学校音楽教育研究会には9つの各種研究会があり、それぞれが毎月1回ペースで月例会を行っています。また各区市町村でも研究会が組織され、やはり定期的に研究会を行っています。中学校にも同様の機会があると推測されます。そのような中、数多ある「学びの場」のなかから本研究大会を選んでいただくことが、残念ながらできなかったわけです。

反省というより弁明に聞こえるかも知れませんが、これが東京の現状であり、あらためて研究大会開催の難しさを感じました。

しかし、内容は充実していたと自負しております。公開授業は、ここ数回の東京大会にはありませんでした。水谷教諭の授業により、リコーダーが音楽づくりにも有効であり、子供たちの音楽活動に根付く楽器であることが再確認されました。また、リコーダー各企業の協力により、リコーダーおよび楽譜等の展示があり、日頃の音楽指導や演奏活動に役立つ情報を得ることができました。

今回の経験をもとに、当会はさらなる発展をしていかねばなりません。その方向性を模索するため、昨年末開催のリコーダーコンテスト会場で参加者、来場客にアンケートを実施しました。驚いたことに用意したアンケート用紙はほとんどなくなり、回収率が約8割でした。詳細は省かせていただきますが、「演奏、交流の場が欲しい」「講習会を開いて欲しい



い」など、どれも前向きな意見でした。コンテストへの出場状況は、リコーダー活動が社会教育に浸透していることの証として一般参加者が多い一方、次代を担う小中学生の参加は減少傾向にあります。アンケートの結果や、研究大会ご参会の皆様からいただいた、温かくそして厳しい激励の一つ一つを今後の糧としてまいりたいと考えます。



開催にあたり会場を快く提供いただきました、江東区立臨海小学校長、実川栄一先生をはじめとする教職員の皆様、ご指導ご助言いただきましたリコーダー演奏家、吉澤実先生、文部科学省教科調査官、津田正之先生、そしてご参会の皆様方に御礼申し上げ、次なる開催地、沖縄県リコーダー教育研究会にバトンをお渡しします。



第41回 全日本リコーダー教育研究会全国大会「沖縄大会」のご案内

この度、標記の研究大会について下記の通り開催する運びとなりましたのでご案内申し上げます。さて、沖縄県リコーダー教育研究会は、発足から36年目を迎えました。沖縄での全国研究大会の開催は第36回大会以来5年ぶりの開催となります。

つきましては、時節柄お忙しいとは存じますが、是非ご参加いただき、ご指導、ご助言賜りたくご案内申し上げます。

■ 大会 主 題

リコーダーで音楽世界をひろげよう(仮)

■ 主 催 ■ 主 管 ■ 後 援

全日本リコーダー教育研究会
沖縄県リコーダー教育研究会
文部科学省、沖縄県教育委員会、南風原町教育委員会
(以下申請予定)
沖縄県音楽教育研究会、沖縄県高等学校文化連盟、沖縄県中学校文化連盟

1. 期 2. 会 3. 日

日 平成28年10月14日(金)
場 南風原町立中央公民館 黄金ホール

9:20	9:45	10:30	10:45	11:35	11:45	12:30	13:30	13:45	15:00	16:15	16:30	17:15	19:00
受 付	公開授業(小学校)	移動・休憩	公開授業(中学校)	移動・休憩	研 究 討 議	昼 食	開 会 式	講 演 会	実 技 講 習 会	閉 会 式			レ セ プ シ ョ ン

4. 大会参加費 5. 講演会 6. 実技講習会 7. 大会事務局

(資料代) 3,000円
講師／津田 正之 氏(文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官)
講師／吉澤 実 氏(リコーダー演奏家)
〒901-0244 沖縄県豊見城市字宜保218番地の1
沖縄県リコーダー教育研究会 事務局 上江洲 学
TEL. 090-9576-8022 E-mail okirikojimukyoku@yahoo.co.jp

全日本リコーダー教育研究会役員名簿

(平成26年9月1日～平成29年9月30日)

役職名	氏 名	担 当	所 属 先 (平成26年9月1日現在)
会 長	牧 野 光 洋		足立区立千寿桜堤中学校
副 会 長	小山内 仁夫 小池 純夫 親 泊 明美	財務 統括 広 報 統括 研 究 統括	平取町立平取中学校 南魚沼市立大崎小学校 沖縄県リコーダー教育研究会
本 部 役 員	井 戸 正 利 長 谷 川 紘 子 樋 熊 三 津 男 上 江 洲 学 漆 畑 友 美 小林 英 明 長岡 む つ み 大 吉 幸 利	財務担当(事務局長) 事 業 担 当 広 報 担 当 研 究 担 当 財 務 担 当 事 業 担 当 研 究 担 当 事 業 担 当	江東区立香取小学校 八王子市立城山小学校 三条市立一ノ木戸小学校 豊見城市立上田小学校 川崎市立東小倉小学校 伊那市立西春近南小学校 鈴鹿市立旭が丘小学校 恵庭市立島松小学校
事 務 局 長	井 戸 正 利	兼 任	江東区立香取小学校
事 務 局 次 長	牛 田 恵 美	事 務 局	東京リコーダー教育研究会
地区担当役員	三 笠 裕 也 菅 圭 隆 小 形 隆 之 嶋 見 靖 子 石 川 祐 子 水 谷 美 恵 子 後 藤 俊 哉 鈴 木 光 山 下 照 乃 小林 英 明 長岡 む つ み 井 上 秀 賢 香 山 美 穂 松 本 聖 子 福 屋 博 子 高 江 洲 博 子 劉 翠 華	北 海 道 担 当 栃 木 担 当 茨 城 担 当 新 潟 担 当 東 京 担 当 東 京 担 当 神 奈 川 担 当 静 岡 (静 岡 地 区) 担 当 静 岡 (浜 松 地 区) 担 当 長 野 担 当 (兼 任) 三 重 担 当 (兼 任) 大 阪 ・ 韓 国 担 当 兵 庫 担 当 宮 崎 担 当 鹿 児 島 担 当 冲 縄 担 当 台 湾 担 当	北斗市立大野中学校 足利市立御厨小学校 古河市立古河第二中学校 佐渡市立金井中学校 荒川区立第九中学校 江東区立臨海小学校 横浜市立笠間小学校 静岡市立番町小学校 浜松市立佐鳴台小学校 伊那市立西春近南小学校 鈴鹿市立旭が丘小学校 大阪リコーダー教育研究会 兵庫県リコーダー教育研究会 宮崎市立櫛中学校 鹿児島市立甲東中学校 読谷村立古堅中学校 牧笛音楽藝術学苑
監 事	馬 場 喜 久 雄 鈴 木 栄 子		総合初等教育研究所 中野区立鷺宮小学校
事 務 局 員	安 藤 夏 生 安 藤 眞 由 美 宮 下 京 子 奥 平 あ ゆ み		東京リコーダー教育研究会 東京リコーダー教育研究会 東京リコーダー教育研究会 東京リコーダー教育研究会
名 誉 会 長	初 代 花 村 大 二 代 徳 山 博 良 三 代 中 澤 正 人		故人 故人 板橋区文化・国際交流財団
顧 問	小 原 惇 夫 三 木 貞 夫 影 山 建 樹 橋 本 勤 也 越 智 健 一 朗 仲 本 朝 昭 皆 川 昌 雄 森 嘉 雄		元新潟県公立中学校 元大阪市立公立中学校 元静岡県公立中学校 元高知県公立小学校 元東京都公立中学校 元沖縄県公立中学校 三条市教育委員会 元新潟県公立小学校
名 誉 会 員	榊 正 治 (鹿 児 島) 玉 利 敬 三 郎 (東 京) 太 田 正 明 (長 野) 八 幡 健 一 (鳥 取)	諸 岡 忠 教 (東 京) 南 雲 照 (新 潟) 花 岡 澄 (長 野) 橋 本 研 (東 京)	中 島 聰 (東 京) 門 野 フ ミ (鹿 児 島) 砂 川 徹 夫 (沖 縄) 近 藤 誠 二 (北 海 道)
相 談 役	吉 澤 実 之 彦 大 竹 尚 俊 北 村 俊 彦	上 杉 紅 童 金 子 健 治 北 山 隆	本 村 睦 幸 吉 澤 徹



編集後記

ここにリコ研だより第3号を発行する。今回もコンテスト審査員より御寄稿いただいたことを心から感謝申し上げます。

また、「第40回記念 全日本リコーダー教育研究会全国研究大会「東京大会」」の実践報告も掲載した。

私たち全日本リコーダー教育研究会(通称:JRS)は昭和47年(1972年)11月25日に創立され、第1回の岐阜・恵那大会を開催した。それから、途中(昭和61、平成17、18年度)諸事情で開催できない年度があったが、基本毎年度に研究大会を開催してきた。そして、今回40回という記念すべき大会となった。

これまでの本研究会の発展にご尽力いただいた、故花村先生、故徳山先生、故原田先生をはじめ関係各位の方々に厚く御礼申し上げます。43年の歴史と共に先人のご尽力を受け継ぎ、今後も皆様と共に、リコーダー教育の発展に取り組んでまいりたいと思っている。

さて、人口減少・少子高齢化の到来というか、かつてない状況の中、我々教育現場は将来を担う子ども

たちの確かな学力を育む教育の推進はもとより、ふるさとを愛し、産業や経済、地域の活力ある未来を切り拓く人材の育成に、学校・家庭・地域・行政が、関係機関と一層の連携を図りながら取り組んで行く必要がある。

また、社会教育活動や生涯学習の振興など、困難な時代にあって人々の心豊かな暮らしを支えるため、教育の役割はこれまで以上に重要になっている。

全日本リコーダー教育研究会としても、音楽教育推進の重点として、器楽の中心的教材であるリコーダー教育を通して、「生きる力を育成する取組の確実な推進」と「取組を支える体制の整備」を掲げ、リコーダー教育の質の向上に向け、次なるステージでの取組を展開しているところであるが、これからの充実のためには、リコーダー教育に関する豊富で的確な情報が不可欠であり、当研究会に賛同されている皆様への期待は大きなものがある。今後より充実した活動を目指していくことをご期待申し上げます。

入会のお知らせ

本会への入会手続きは随時受け付けております。一緒にリコーダーの花を咲かせましょう!

共に学び、共に成長するリコーダー愛好家の皆さんの入会を心よりお待ちしております。

本会の会員は次のとおりとする。

- (1)正 会 員 リコーダーを愛好する個人で別に定める会費を納める者
- (2)研究会会員 各都道府県を単位としたリコーダー教育研究会をもって組織し、構成員を5名以上有し本研究会に会員名簿と、会則を提出できる団体で本研究会が承認した研究会で別に定める会費を納める団体
- (3)会 員 本研究会が開催する全国研究大会及びコンテストで参加資格及び出場資格を得た個人及び団体で各事業の申し込みにおいて別に定める会費を納める者
- (4)維持会員 本研究会の目的に賛同し、別に定める会費を納める者及び団体
- (5)名誉会員 本会に対し特に功労のあった者のうちから、総会の議決をもって推薦された者。

(名誉会長、顧問、参与、名誉会員及び相談役の名称で名簿に記載する。)

会費は、年会費として徴収する。

(1)正会員一人= 3000円

(ただし研究会会員で登録した者は免除)

(2)会員一団体= 3000円

(3)研究会会員一研究会= 10000円

※研究会会員とは、各都道府県を単位としたリコーダー教育研究会をもって組織し、構成員を5名以上有し、本研究会に会員名簿と、会則を提出できる団体で本研究会が承認した研究会を指す。

※研究会会員に所属し、会員名簿に掲載されている者は正会員と同様の扱いとする。

(4)会費の納入は、毎年6月末日までに納入すること。

(納入方法は別途定める。)

申し込み先 _____

全日本リコーダー教育研究会

〒120-0022

東京都足立区立千寿桜堤中学校内

住所: 東京都足立区柳原2-49-1

電話: 03-3888-5081

FAX: 03-3888-5082

<http://www.zenrikoken.com/>

Email zen.rikoken@gmail.com